

財団だより

# 多摩川

1980. 12. 第8号



清流に住むカミムラカワゲラ(幼虫)



雪の玉川上水(武蔵野市御殿山で・榎本幸郎撮影)

## ■川のはなし■

### ⑧ 玉川上水と江戸西郊の開発

承応2年(1653)家光の遺志を継いだ家綱は、玉川上水、つまり多摩川と江戸を直結する水路の開発を計画し、羽村一内藤新宿大木戸間(現在の西多摩郡羽村町一新宿区内藤町)間の約44キロの水路を、武蔵野台地上に掘り割った。(中略)

玉川上水が武蔵野に縦横に走る尾根を“綱渡り”した状態で流れるように設計したということは、水路の兩岸のどの部分にも分水が可能であるという、いわば副次的な効果をもつ結果になった。『上水記』が書かれた時点には、玉川上水から台地上の村々に分水した箇所は35ヵ所におよんだ。(中略)

こうして江戸における最大の都市問題である水道施設は神田・玉川両上水により、ほぼ解決し、その後明治34年(1901)6月30日まで、江戸—東京市民の水道として約250年間利用されつづけた。

しかし玉川上水の本来の目的である江戸水道としての役割のほか、前述のように武蔵野台地に分水された用水は、台地の広大な面積を農地化した。すなわち「新田」の開発である。もっ

ともこの場合の「新田」とは、水田を意味せず、沿岸各村の飲料水と畑の灌漑を意味した。その結果江戸の西郊は急速に近郊農村化していった。

この場合の近郊農村の役割は、江戸に対する野菜・果物・燃料の供給地として、また江戸で生産された下肥(人糞・尿)の引取地としての役割を果たすものであった。上水沿岸の地域が、現在ほど宅地化しなかった時期には、上水から分水された用水は平均1メートル、細いものは30センチ程度の幅の水路で、点在する農家を一軒一軒、丹念につないでいた。曲折し分流しながら清冽な水が絶えず台地の上をうろおしていた。こうした水路網の維持管理は、上水沿岸の各村の注意深い配慮のもとに、つい最近まで残されていた。現在では多くの水路が埋められて道路化され、あるいは「雑排水路」となってしまったが、まだ注意深く観察すればその跡は至る所に発見できる。

(江戸の川・東京の川・鈴木理生・日本放送出版協会・1978)

## 多摩川散歩

### ●冬枯れの玉川上水を歩く

榎本幸郎

江戸は開幕後50年ほどで人口が百万人を突破、深刻な水不足となり、幕府は多摩川からの導水を計画し、難工事の末、日本で初めての本格的水道として完成したのが全長40余kmの玉川上水である。羽村で取り入れられた水は、武蔵野台地をよぎり林をくぐって四谷大木戸（今の新宿御苑）へと流れ続けて来た。18年前浄水場の移転で大半は上水路としての役目を終え、最下流10kmはごく一部を除いて姿を消したが、最上流12kmは完成後327年後の今日もなお都民に飲料水を運び続けている。

この上水は左右35本の用水を分ち、武蔵野の新田開発をすすめた。激しい流れの玉川上水は、一度落ちたらまず助からない『人喰川』と恐れられて来たが、一面、長い公園のような存在でもある。

若葉の萌える春も、緑濃い夏の上水もいい。だが私は、晩秋から冬、木枯しの、小春日和の、又雪の上水が最も美しいと思う。カサカサと落葉を踏み、ドングリの実がピチッと靴底に音する日。今、東京都はこの上水敷に遊歩道づくりを進めているが、この季節に最もふさわしい散歩道の一つをご紹介します。

国電立川駅北口から出る立川バスで、上水営業所で降り、少し歩くか、又は西武拝島線の玉川上水駅で降りれば、目の前が上水の流れた。下流に向って歩きはじめる。やがて水道局小平水衛所が現れる。多摩川から来た水は、ここから暗渠で東村山浄水場へ送られるので、これから下流の上水は水量もほんの僅かである。左岸を歩くと、上水に平行して左側にトンネルをいくつもくぐる流れ

がある。これは玉川上水の残り少ない分水の一つの小川用水。ここから下流は、相当の深さで側壁の崩落が進み、防護柵もないので、足元に注意したい。小川橋の手前で上水が奇妙に変形している。これは、戦時中、米軍機が近くの工場へ投下した爆弾が外れて破裂した跡である。この小川橋のもとに、天保13寅年に建てられた石橋供養塔がある。当時は大半が木橋だったが、この橋は石橋であった。交通量が多かったためであろう。

更に下流への雑木の河辺林が続く散歩道は、武蔵野の面影をとどめる。やがて着く寺橋は、ここから北方にある臨済宗円覚寺派の小川寺の発願で架けられたに由来する橋名らしい。この先には、旧鎌倉上みちが通る。鎌倉幕府成立の大きな原動力となった武蔵野武士団が、頭の中を去来するが、この細い、今は知る人も少ない道は、かつて頼朝も、北条時宗も、遠征に、又、鷹狩りに駒をすすめたのである。

いつしか、西武国分寺線の踏切になる。鷹の台駅が近い。この線を利用して帰路につくのもよいが、もう少し歩くと久右衛門橋に至る。ここからバスで国分寺か、西武新宿線の久米川がよい。

今は、歩くほどに、ヒヨドリのカン高い、だがもの悲しいような声がしきりに聞え、シジュウカラやジョウビタキの可愛い姿が眼につく。時にはセキレイも。

気ままな、しかし、ここに刻まれた歴史を振り返りながらの、この上水の散歩道は、やはり、玉川上水の重みを改めて考えさせられる。（郷土史家）



## 私と多摩川



(多摩川「オシャモジ」にて 釣り人は筆者 昭和10年頃)

### ●アユの多摩川

#### 中村 守純

本郷の駒込で生まれ育った私が遠く離れた多摩川でアユ釣りを覚え、親しむようになったのは父の影響である。父の郷里は群馬県の桐生で、近くを流れる水のきれいな桐生川で魚釣りをして育ったと聞かされた。父は東京で暮すようになっても故郷の川が忘れられず、桐生川によく似て、これより一まわりも二まわりも大きかった、当時の多摩川を釣り場を選んだらしい。父は私が小学校へ入学したころ(大正9年)から毎年アユ解禁を待って私を多摩川へ連れていってくれた。

当時の多摩川は水が澄み、アユの天然遡上も実に多かった。二子付近や京王多摩川原などには屋形船が無数に並び獲りたての天然アユの料理を供していた。当時のアユ釣りはすでにドブ釣りの時代を迎えていたらしいが、父の釣りは専ら桐生川仕込みの毛鉤りの流し釣りだった。しかもハヤ鉤を用いたので獲物は殆んどハヤ(ウグイ)かヤマベ(オイカワ)で、アユはめったに釣れなかった。私も父をまねて短い竿を振って毛鉤釣りをやったが釣れる魚の種類は同様だった。それでも解禁直後など極めて稀ながらアユが釣れることがある

とまるで宝物でも得たように親子して喜び会ったものである。父は気の短い方だったのでいつも釣りはほどほどに切り上げ、近くの屋形船でアユの塩焼を着に一杯やり、私も相伴にあずかるのが恒例になっていた。その塩焼の香りが佳く、うまかったこと、60年近くたった今でもハッキリと記憶がよみがえってくる。父のお伴をしておの多摩川への釣行はほぼ小学校を出る頃まで続いたが、年間の出漁回数は父の仕事の関係でせいぜい2,3回程度だった。そして小学校の高学年に進んだ頃にはどうも毛鉤の流し釣だけではあきたらず、当時、多摩川で全盛期を迎えつつあった「ドブ釣り」で是非アユを釣ってみたいと思うようになった。

その念願は昭和2年、中学へ進学した年にやっとかなった。その年、6月の第1日曜日(だったと思う)級友のA君(元上野動物園長、今も健在)と共に勇んで出かけた。場所は京王線関戸駅(現在の聖跡桜ヶ丘駅)から数百メートル上流の「一の宮の渡し」付近だった。父にねだってやっと買って貰った3間半のアユ竿と4,5本のアユ毛ばりを用意して、居並ぶ大勢の大人に混っておそろおそろ竿を上げ下げした。この年は特に天然遡上が多かったとみえて、二人の釣果はそれぞれ十数尾ぐらいにはなったと記憶している。これが病み付きになって、以来私が水産講習所を卒業する昭和11年までの9年間、シーズン中の休日は殆んど多摩川通いについやした。釣り場の上流は本流と秋川との合流点から、下流は「二子」までで、特によく通ったのは二ヶ領用水堰下流の通称「オシャモジ」付近だった。

そんなわけで多摩川は私にとってはアユ釣りを教えてくれた恩義あるホームグラウンドである。

私は多摩川の現在の姿を見るにつけ、みんなの努力で今後いつの日か「アユの多摩川」が復活する日を、そしてその日の一日も早やからんことを心から待ち望んでいる。(東海大学講師)

よみがえ

## 甦れ！多摩川



雨の中での自然観察会

## ● 青梅青年の家の活動

多摩川は自然観察や自然教育のフィールドとして、さまざまなグループが利用している。しかも最近の自然観察会は、多摩川においても、単に植物や野鳥の名前を学ぶ観察会から、生活とかかわり合う自然を学び、考える観察会にまで成長して来ている。

「自分たちの環境は、自分たちが守り育てる」という基本から出発した自然保護のための観察会は、主に一般の有志や市民グループのボランティア的な活動として進められて来た。一方、社会教育の一環として、自然保護との取組みが、流域の行政体でも試みられ始めている。今回は、野外活動を通じ、自然と自分たちとのかゝわりを体験しながら考えてゆこうという、ユニークな活動を重ねている都立青梅青年の家の活動を紹介しよう。

青梅線の青梅駅と東青梅駅の中程、山寄りの青梅鉄道公園に隣接した丘の上に「青梅青年の家」がある。緑濃い奥多摩の山々や多摩川の清流に近いこの家は、恵まれた自然環境の中で、青少年にスポーツや野外活動をはじめとする多様な学習、文化活動の場を提供する目的で、昭和37年、東京都により建設されたものである。すでに、延約20万人の都民が訪れ、さまざまな活動を通じて、人や自然との交流を行ってきた。

昭和50年度から、この青梅青年の家が取り組んでいる事業のひとつに「自然に親しむつどい」がある。この事業は、自然保護の立場から身近かな

自然を見直し、自然と人間との関係を考える機会を提供しようとするもので、周辺の豊かな自然のフィールドを利用して、自然観察や学習会を行なっている。「親子野外学習」「自然保護と青年」また、春と秋に行なう「自然に親しむつどい」「ひとりのできる自然保護」「親子の自然教室」などが主な催しものである。こうした催しは、土曜日から日曜日にかけて主に一泊二日で行なわれている。その内容もバラエティに富み、周辺の山や丘で観察会やオリエンテーリングを行ないながら、あるいは、キャンプファイヤーや飯ごう炊さん会で、星座を見たり、野草の試食を行なってみたりと、おもしろいアイディアを盛り込みながら、参加者を自然の中にとけ込ませている。又、夜の学習会では、身のまわりの自然環境や、自然に対する考え方、などが講師をかこんで熱っぽく語り合われている。年を追うに従いがい、参加者から好評を得るようになったが、その大きな特徴は、自然を知るための手だてを、レクリエーションを兼ねながら体験していくという点で植物あそびや野草を食べるといった事を通じて、自然をより身近かな存在にしていくという方法が親しみを感じさせる点であろう。そして、この催しを指導する講師も市民の愛好家や研究者であって、堅苦しさは全くないことにもよろう。昨年の夏に行なわれた、親子の自然教室では、オリエンテーリング、夜の虫の視察、星の観察、自然観察、植物あそびなどが行なわれ、32組の親子が参加している。この会に参加した人達の感想を聞くと、自然への興味は、いかに身近かな問題から出発する事が大切かがよくわかる。「母親にもよくわかり好感がもてた。」「虫がつかめるようになりました」といった感想は、いわば押し着せではない、手づくりの自然教室の良さであろう。ほぼ無償で講師をする市民の研究者もいっしょに泊り込み、わかりやすく指導している。自然にふれる事の中から自然環境と人間社会との関連を考える機会を提供する、という主旨を身を持って実践しているこうしたボランティアの姿は、自然の良さをひとりでも多くの市民に知ってもらおう事が、自然を守る最短の道である事を教えてくれるような気がする。

## 《“多摩川およびその流域の環境浄化に関する調査試験研究”募集》

当財団は、昭和50年から表記研究の公募を毎年行ってきました。既に79件の研究に対し助成金を交付し、30件の研究成果を得ることが出来ました。

昭和56年度も引き続き「多摩川およびその流域の自然環境・社会環境の調査・試験研究」をひろく募集いたします。

対象者は、多摩川およびその流域の環境浄化に関する調査・試験研究の意欲のある方でしたらどなたでも応募できます。

### 研究対象

- (1)産業活動または住環境と多摩川およびその流域との関係に関する調査・試験研究。
- (2)排水廃棄物などによる多摩川の汚染の防除に関する調査・試験研究。
- (3)多摩川およびその流域における水の利用に関する調査・試験研究。
- (4)多摩川をめぐる自然環境の保全・回復若しくは創造に関する調査・試験研究。

等、財団は多摩川の環境問題を広義にとられ、基礎、臨床研究いずれにも尚一層のご参加を期待しています。

### 年度別助成件数・助成金額

年 度	助 成 件 数			助成金額
	新規	継続	計	
昭和50年度	6		6	9,500,000
昭和51年度	5	6	11	19,994,120
昭和52年度	23	3	26	30,269,910
昭和53年度	14	19	33	31,294,340
昭和54年度	18	18	36	40,256,730
昭和55年度 (10月1日現在)	13	19	32	41,600,000 (千定)
合 計	79	65	144	172,915,100

### 公募締切日

昭和56年 1月31日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

連絡先、 〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号  
(渋谷地下鉄ビル内)  
電話 (03) 400-9142  
(財)とうきゅう環境浄化財団

## 財団の事業紹介

### 〈研究助成〉

去る、10月3日第9回定時選考委員会を開催し、昭和55年度（第2次）研究助成課題の選考を行いました。今回選考されました研究は、A類研究

3件、B類研究3件です。助成研究課題は次のとおりです。

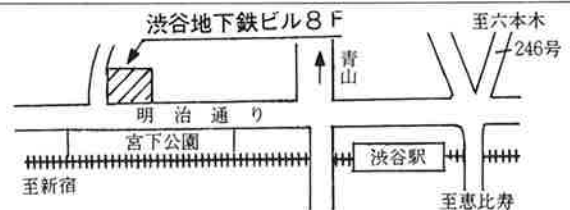
研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
〈A類研究〉		
多摩川における汚濁物質の収支と流下過程	市 川 新	東京大学工学部都市工学科助教授
多摩川水系、秋川流域の農住混在地域における適正な土地利用・水利用のあり方に関する研究。	駒 村 正 治	東京農業大学講師
多摩川水系流域における蛛形類の分布とその生態学的研究	松 本 誠 治	杏林大学医学部生物学教室助手
〈B類研究〉		
多摩川中流・秋留台地の下水処理と環境浄化に関する基礎的研究	角 田 清 美	東京都立武蔵村山東高等学校教諭
多摩川における環境教育	濁 川 富 雄	東京都立文京高等学校教諭
多摩川中・下流域及び多摩水道橋付近の水質調査ならびに狛江高校を主とした大気汚染の調査	浅 川 昭	東京都立狛江高等学校教諭

### 〈編集後記〉

この10月、多摩川流域環境保全対策連絡会の水質分科会が、この5ヶ年間の多摩川の水質について発表しました。その結果をみると、下流部の水質改善はいくらか進んでいるものの、中・上流部にかけて悪化が広がり、もしくは、横ばい状態であるとの結

果がでています。冬場の褐水期は水の流れも悪く、又、水温の低下で自浄能力も低くなりますが、今年も大くの冬鳥が飛来している水溜りをみていると、多摩川の水面が水鳥にとっても住みにくくなる事が懸念されます。

- 発行日 昭和55年12月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)400-9142



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1  
TEL (0488)31-8125